
彩鏡学園特殊能力科

朔羅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

彩鏡学園特殊能力科

【Nコード】

N4045P

【作者名】

朔羅

【あらすじ】

いい年こいて、二人の姉弟が迷子になります。以下略。

迷子の二人

ここは国立彩鏡学園。さいきやうがくえん

全国の超人、天才、大富豪などが集まる日本最大の学園だ。この学園は普通科、数理学科、人文教育科、VIP科、体育科、そして特殊能力科の6つに分けられる。

この、特殊能力科は学園内で最も人数が少なく、変わり者が多いことで有名だったが、具体的に何をしているのかはわからなかった。

そんな特殊能力科に、ある一人の姉弟が乗り込んできた。

名前は光田来羅こうでんらいらと光田来斗こうでんらいと。大阪に住んでいた『特殊能力者』である。

姉である来羅は16歳、弟の来斗は14歳、どちらもまだ若く人を引き付ける外見をしていた。

「姉ちゃん、此処どこ？」

「アタシに聞かれてもわからん。」

二人は馬鹿でかい校内で迷子になり、若干姉弟喧嘩が起こりそうになっていた。

「だいたい、姉ちゃんが地図忘れんのが悪いんやろ。」

「はあ？来斗がアタシに頼りつきりなんが悪いんやろ。」

陰悪な雰囲気の中、二人は更に歩を進めていく。

来羅は長い黒髪をひとつに束ね、早速もらった制服を着崩しており、流れる汗をそのままにしているという、女らしからぬ女だった。

一方来斗は長めの黒髪にきちんと着こなした制服。そして汗ひとつ

かかないある意味女の敵のような男だった。

「ほんまに此処どこ？」

「だから、彩鏡学園。」

「そんなことわかってるわ。姉ちゃんに聞いた俺が馬鹿やった。」

ただでさえイラついている来羅を更に怒らせる。

「うるさい！！誰が馬鹿やねん！！」

二人のテンションと機嫌は最悪に陥り、もう会話さえもなくなった。
そのときだった。

「あんたらが、新しい能力者？」

男の声が後方から聞こえた。

「「誰？」」

二人が振向くと、そこには茶色にところどころ赤の混じった髪
の17、8歳くらいの青年がいた。

電光石火（1）

「俺は日向烈火。ひゅうがれつか ここの特殊能力科の1年生だ。」

「「特殊能力科!?!」」

その青年の言葉に、二人は声をそろえて反応した。

「ああ。」

「すみませんっ!! 初対面の人にほんま悪いんですけど、特殊能力科の校舎まで連れてって下さい!」

来羅が頭を下げる。

「…あんた、誰?」

当然の質問だ。

「あっ…すみません!! 私、光田来羅です。こっちが弟の来斗です。」

「特殊能力科の転校生って、あんたら?」

「えっ? あ、はい。多分。」

もはや何故ここに着たのか忘れている。

「何? 能力。」

「え…あ…雷…ですけど…」

「ふーん。じゃ、力量試しってことで。」

烈火が突然指を鳴らした。すると、来羅と来斗の周りは炎で包まれた。

「はあ！？何これ。」

「…お姉ちゃん、何したん？」

「えっ！？自己紹介。」

「わかつとるわ。何で攻撃されてんねんって聞いてんの。」

「知らんわアホ！！」

「俺の力は炎。お前らがどれだけの力を持ってるか、試してやるよ。」

炎の向こう側から、烈火が告げる。

「なんでそんなことされなあかんねん！！」

「俺、強いものにしか興味ないんだよね。だからかな？」

そう笑顔で告げる烈火に、二人は口を揃えてこう言った。

「「あんだ、ムカつくな。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4045p/>

彩鏡学園特殊能力科

2010年12月18日18時39分発行